其の事件と言うのは、我洋糖商会が北国の或る得意先の荷物に荷主には内証で保険を付けて置いたのが物を言ったのである。現今では海上保険を付ける事は常識で商人の日常茶飯事であるが、其の頃田舎では保険の事など種種勧めても中々聴入れられなかったのである。保険の先覚者であり進歩主義者の柳田氏はＦＯＢで得意先に売った様にして実はＣＩＦで仕切ったのであった。荷主は案内の荷物船が沈んだとの報を受取るや一家浮沈の一大事とばかり青くなって飛んで来たのも無理はない。全財産を此の荷に掛けて居たのである。神戸に着くなり店へ来てみれば現実は予想に反し意外にも彼が投じた資金以上利益迄見込んだ金が待って居たのである。此の規模の保険教育が北国商人仲間で大評判となり、平生、柳田両氏共に其の営業振の一大広告をしたのであった。其の時其の荷主から贈られた記念品が僕の家に未だに残って居る。

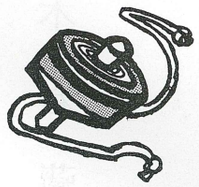
金子氏の無屯着は有名であるが、小僧時代に朝着物を裏がえしたまま平気で其の侭使に行ったのには母も困ったものだとコボして居た。此の様な無屯着から起った逸話は中々多く例を挙れば限がない。

嘗って杉山茂丸氏が金子は此の頃煙突病にかかっていると評された如く、新事業を次々と起し事業に没頭して事業以外の道楽は殆ど無かった如く想われるが水泳、釣漁、狩猟は仲々好きであり上手でもあったが、多忙と持病の痔疾の為め中止の形であった。同氏の暑中の冬装束は右持病による極度の貧血の現れであった。

記憶力の好い事は頭脳の明晰と共に金子氏の特色の一である。それが如何にして常に保たれて居たかと言うと、永年の間に養われた随時随所で五分でも十分でも熟睡することの出来た精神集中力である。あの南船北馬席の暖まる暇なき大活動が出来た原因も此の辺にあるのではないかと想われる。太閤の後に太閤なしの諺通り天才的人物の後に天才なしである。僕は野心を殺し成るべくジャマにならぬ様に心懸けたものである。

色々と両氏の思出でをたどれば記すべき、又は筆に出来ない秘話も沢山あるが、要するに両氏共鈴木家に対しては非常に忠実で晩年に至る迄我々が子供の時代からの親しみと主従関係は少しの変化もなかった事は両氏共に大義明分を心得た真の大人であったからだと僕は思っている。

（故人遺稿）



薄田泣菫の隨筆に出る
金子、柳田の若い頃

薄田泣菫の散文集「猫の微笑」（昭和二年刊行）の一章に「釜屋の老人」というのがある。その中には舊思想の釜屋の老人を中心にした金子柳田両翁の面白い話が載っている。鈴木商店に出入する商人には色々型の変った人物が澤山ある。茲には此の釜屋さんと云う剽輕で経濟家で頑固な骨董的人物を此の散文集から引いて、明治中葉の商人氣質を窺ふよすがとした。

今はむかし、明治二十七八年の日清戰爭前後の頃であった。その当時、名古屋に釜屋といって、伊勢灣方面は云うまでもなく、大阪神戸までも、名前の知れわたった商家があった。そこの主人水野安兵衛（釜屋の老人）は、その頃もう六十過ぎの老人だったが、商賣の取引ぶりにも平素の行狀にも、世間並の人達とは違った、隨分思いきったことを平氣でするので聞えた男で、普通ならば人に嫌がられて、とても許されそうにもないことが、

「相手が釜屋さんじゃ、どうにも……」

と、そのまゝ世間からも、取引先からも、見遁しにせられるようなことがよくあった。今も大阪神戸の大店の老番頭のなかには、釜屋の主人をよく知っているのがあって、偶にそんな話が出ると、

「名古屋の釜屋さんですか。あの方には隨分苛められたものです、一口に云えば、えげつない商い振でしたが、それでいて、腹が立たなかったのが不思議なようです、何しろ変物でしたからね……」

と、きまったように笑い笑い、その釜屋の主人の一風変った仕事振を語って聞かせてくれる。水野安兵衛といえば、それほどまでに風変りな商人であった。

(2)

安兵衛は、世間一般の商人がするように、どこへ持ち込んでも通りのよさそうな、普通の商品を取扱うことが大嫌いな性分だった。この人が手をつけるのは、疵物とか、端物とかいったような、普通の商人の持て余した、または滅多に取扱おうとしない品物に限られていた。濡れのある砂糖、汚点のある洋服地、端物の陶器、――大阪神戸邊の商店で、そういう物を抱えて困りぬいているものがあると、安兵衛は犬のようにすばしこくそれを嗅ぎつけて來た。そして話がまとまって取引がすむと、安兵衛はかねてから兵庫沖に廻してある自分の持船、安心丸といふ帆前船に積み込む。こうして船が積荷で一杯になるまでには彼は毎日のように大阪から神戸兵庫へかけて、めぼしい商店を一軒一軒こくめいに歩き廻って、

「困りもののお持ち合せはありませんか」

「疵物や端物の出はありませんか」

と、訊ねるのを止めようとしなかった。そんな折の安兵衛は、地味な木綿着の裾を端折って、脚には麻裏草履をはいていた。

釜屋の商賣振りは、普通の商人とはすっかり行方が違っていた。この爺さんは、どんな場合にも手帳と鉛筆とを忘れたことがなかった。困り物が見つかると、爺さんは膨らんだふところからそれを取り出して、相手の鼻先に突きつけたものだ。

「お手数をかけてすみませんが。あんたの手でちょっと品書きを作ってもらえませんか」

爺さんはどんなことがあっても、自分の手で品書きを認めようとはしなかった。賣り手の店のものの手で、持合せた品物の名前、個数、商標、價格などの明細書が出來上ると、爺さんはそれをふところに捻じ込んで、またほかの店へ廻って往く。そしてそこでも同じように品書きをしたゝめさせる。こうして一

日中兵庫神戸の得意先を歩き廻って、夕方になると、きまったようにそのうちの一軒の店先へ、ひょっくりと尻端折りの姿を現わして來る。それを見つけた店のものが、

「ほら、安兵衛さんが歸って來た。すると、うちの品が一番安かったわけだな」と、すぐ品物の値段のことを思い浮べたところで、別段それが早過ぎるという心配はなかった。なぜかと云って、爺さんがみそさゞいという小鳥と同じように、どんな場合にも一番低い枝を選ってとまりたがるのは、この人の性分として仲間に知れきっていたことだったから。

爺さんは、歸って來るが早いか、すぐに値段の懸合いを始める。相手の顔色などには頓着しないで、思い切って値切る。そしてどうしても値段が折合わないような場合には、爺さんは吸いさした煙管を煙草入にしまい込みながら、いつもきまったように艀賃の事を訊いたものだ。

「値段が折合わねば仕方がない。ついでだから聞いておきますが、艀賃の見積りは？」

「艀賃は五拾錢の見積りです」

「承知しました」

あくる朝になると、爺さんは兵庫の濱へ出かけて行って、艀屋という艀屋に、片っ端から艀賃を問うて廻る。どんなに沖景氣のいい、いそがしい時でも、一人や二人は艀を遊ばせているのがあるもので、爺さんはそんなのを拾って、艀賃を三拾五錢に取りきめることが出來たら、その足で昨日の店へ歸って來て、是が非でも拾五錢だけは値切って、その上でやっと買い取ることに談をきめたものだ。

商談がまとまると、爺さんはその場で手金を打って、相手方の店のものにその受取證を認めさせる。證書に使う用紙は、いつも相手方の店の名が刷込んである葉書に限られていた。

安兵衛爺さんが、取引にそんなことをするようになったのは、長い間いろいろな經驗を重ねて、考えぬいた上のことで、爺さんに云わせると、これにはいろいろな得分がある。第一に、手帳や葉書に相手方の手で書かせると、後日になって何か持上った場合に、それが有力な證據材料になる。第二に、その葉書は手金の受取證にもなれば、また賣買契約書の代用にもなる。そのためにわざわざそんなものを作る手數が省けるのみならず、印紙代とか用紙代とかの費用がいらなくなる。第三に、相手に書かせていると、その間自分はじっと物を考えることが出來るので、相手の弱味を見つけて、取引を有利にするような、いい分別を考え出すことが出來る。——と云うのだ。

安兵衛爺さんの商賣振は、まずざっとこんなものであった。

爺さんと懇意なある男が、こんなことを訊いたことがあった。

「釜屋さん、あんたのような手堅い商賣振だったら、どんな場合にだって失敗はありますまいに、何だってまた堅氣な商人が、滅多に手出しをしそうにもない困り物ばかしお扱いになるんです」

すると、爺さんは次の様に答えた。

「手前の商賣は、品物の取引ばかりじゃありません。相手の商人さんとの取組合です。品物に濡れがあったり、汚点があったりしますと、いくら値段を落しましても、その上にまだ持主の心に負け目というものがあります。その負け目へ喰い込んで往って、こっちの思う通りに金儲けが出來るのは、この商賣の一得で、これを思うと、疵物買もなかなかやめられませんわい。」

(3)

安兵衛爺さんは、神戸の鈴木商店へはよくやって來た。あるとき、商談が少し長びいて正午過になった。大事なお得意なので、店ではお膳を出してもてなした。今總支配人として同店の実權を握っているK（金子）は、前垂がけの手代姿で爺さんの接待をすることになった。

「えらい御造作をかけてすみません」

爺さんは、Kにちょっと挨拶をして箸をとった。

お相伴の膳に座ったKは、食事をしながら、それとなくこの風変りな老人の素振に氣をつけていた。老人は時々口のなかで何やら小聲に呟きながら、箸をもった指を窮窟そうに折りかゞめて、錢勘定でもしているらしかった。見ているうちに、Kはいくらか無氣味に感じ出した。

「商人というものは、ああして御飯を食べる間も、錢勘定のことが忘れられないものかなあ。」

食事がすむと、老人はそゝくさと鈴木の店を出て往った。Kは店のもの達と一緒に座敷を取片附けようとして、ふと客人のお膳の上に不思議なことを見つけた。

「おや、釜屋さんは御飯と汁物の外は、何も召上っていないようだよ。」

皆はお膳の上をあらためた。　肴はいうまでもないこと、刺身、煮付、猪口——そういったような汁氣のないものは、何一つ箸がつけてなかった。

「あの人はお年寄だから、歯が悪いに相違ない。あゝいうお金持のことだ、あやかってもいゝから、一つみんなでお裾分にあずかろうじゃないか」

と居合せた店のものたちは、てんでに箸を取って膳の上をつゝき廻した。焼肴の鯛が月給取のように頭と骨とだけになって、皿の上で寒そうに慄えている頃になって、日に焼けた赤ら顔の船頭らしい男が、のっそりと鈴木の店に入って來た。

「わっしは釜屋の安心丸のものだすが、先刻は旦那がえらい御造作をかけました。何でも御馳走の残りがごわすそうだから、わっしがいただきに参りました。」

店のものは呆氣にとられて互に顔を見合した。仲間のなかで一番どっさり頬張ったSという、後に鈴木系統の日本——株式會社の社長となった手代の一人は、極り悪そうにすっと立ち上って奥の間に消えてしまった。Kは当惑してぼんのくぼへ手をやった。

「それはお氣の毒さまですな。釜屋さんが何もおっしゃらなかったもんですから、お膳はもう片附けてしまいましたよ。」

「それは、それは。旦那がえろう氣をもまれて、早う往かんと、お店には猫がどっさりいるからと云われたが、やっぱり遅うござりましたかなあ。」

船頭は大きな聲でわめく様に云って、急にがっかりした色を見せた。

皆は苦笑いするより外には仕方がなかった。

(4)

鈴木商店の重役柳田冨士松氏が、あるとき商用で名古屋へ往ったついでに、水野家を訪ねたことがあった。

その日は、安兵衛爺さんは、いつになく上機嫌だった。いったい節儉家とか、吝嗇家とか云われる人達には、厭世家などと同じ様に、嚴肅すぎるほど生まじめなのが多いもので彼等は他人に氣の毒なことのある場合の外は、滅多に笑おうともしないものだ。釜屋の爺さんもその一人であった。

「これはようこそ、さあ、さあ、お上り……」

釜屋さんは、手をとらぬばかりにして柳田氏を座敷にひっぱりあげた。そして一通りの挨拶がすむと、

「一風呂浴びて汗を流したらどうです。湯屋は直きそこにありますから」

と云って、丁度秋も末の頃なので、柳田氏が歸り途に湯冷めがして、風邪をひいても困るからと、たって辭退するのをも肯かず、無理やりに店の小僧をつけて町内の湯屋へ案内させた。柳田氏は氣が進まなそうに着物を脱いで湯につかった。

湯から歸って來た柳田氏の、ぽっと上氣した顔を見ると、

「魚の多い神戸のお方だから、ぐっと趣向を変えて、今日はお精進にしてみました。お口に合うかしら」
爺さんは、不在の間にちゃんと用意しておいた膳の前に客を案内した。爺さんのこんな仕打を、今日まで一度だって見たことのない柳田氏は、心から恐縮してしまった。で、精進料理はあんまり好きな方でもなかったが、坊さんの様に殊勝らしい顔をして、
「これはどうも結構で……」
と云い云い、油っこいがんもどきを噛ったり、なまぬるい豆腐の汁を吸ったりした。
夕方になって、客は汽車に間に合う様に、俥で停車場に送られた。そこには晝間湯屋に案内してくれた小僧が、わざわざ見送りに來させられていた。
「釜屋さんには、今日はいろいろ御造作をかけてすまなかった。結構な精進料理に、お湯屋に……」
柳田氏は、店に歸ったら、くれぐれもよく禮を云ってくれるように、小僧に頼んだ。
「旦那はん、そないお禮云わはるには及びまへんぜ」小僧は言葉づきが大阪ものらしかった。「あのお精進、あれなあ、御近所の質屋の御隠居はんが死なはって、今日が丁度満中陰だっしゃろ。その配り膳だんがな」
「え、満中陰の配り膳」
柳田氏は氣味悪そうな顔をした。
小僧はそんなことには頓着しなかった。
「それから、あのお湯屋もな、うちの借屋人だすよってうちのもんと、店のお客さんだしたら、湯錢拂わんでもえ、約束だんがな。」
「ふうん。」柳田氏は感心したように頭をふった。「それじゃ今の俥は……」
小僧はいっぱしませた口をきいた。
「あいつも借家人だすよって、同じ定めだっせ。――うちの旦那はん、なかなかしたゝかもんだすさかいにな。」
丁度そこへ神戸行きの汽車が地響させて入って來た。柳田氏は名古屋を逃げ出すような氣持で、慌てゝそれに飛び乗った。

(5)

いつだったか、安兵衛爺さんが豆粕を買いに、神戸の鈴木を訪ねて來たことがあった。豆粕といっても、いつもの通りの困り物なのは云うまでもなかった。爺さんを案内して、そんなものを持合せている兵庫の店々へつれてゆく役は、その頃番頭になったばかしの金子直吉氏に振り当てられた。
時季は冬だった。寒い風の吹くなかを金子氏は爺さんを連れて、南京町を通りかゝった支那人くさい、脂っこい食料品屋の立ち列んだなかに、見すぼらしい燒芋屋が一軒はさまって、焦げつく様な匂を、あたりの大氣にぷんぷんさせていた。
爺さんは燒芋屋の前に立ちどまった。店の亭主はこんがりと燒上ったばかしのさつま芋を、一つずつ釜から取出していた。
「芋はいくらしますな。」
爺さんは、丁寧な言葉つきでその値段を訊いた。亭主はぶっきらぼうに答えた。
「二つ一錢だんね。」
「二つ一錢。それは高い。三つ一錢にしてくれませんか。」
「あほらしい。」
「三つにまからんという筈はない。」
爺さんは、その当時さつま芋の値が貫でいくらする。それが燒芋にして幾つとれる。炭釜の費えを入れて、これこれの勘定になるから、三つ一錢にまからぬ法はないということを、細かい算盤の上から割出して説いた。
「そんなに儲かるもんなら、おまはんが店を出しなはったらど

うだす。」
亭主は箸のさきで、釜のなかの芋の燒加減を見ながら、無愛想にあしらった。
「出してもいゝが、今日の間には合いかねます」爺さんはにっこりともしなかった。「どうです、まかりませんかな」
「まかりまへん」
「そんならこうしましょう」爺さんは内ふところへ手を入れたかと思うと、燒芋を一つそこから取出して見せた。芋は爺さんの心臓のように、萎びて小さかった。「これを下に出すから、三つにまけておいて下さい」
この思いがけない取引振は、店さきに待っていた金子氏をびっくりさせた。芋屋の亭主は、この不思議な老人を、胡散そうな眼つきで、しげしげと見廻していたが、とうとう我を折ったらしく、黙って客の手から萎びた芋を受取ると、代りに燒は上ったばかしのを三つ手渡した。亭主の受取った芋は、客ん坊の魂のように、も一度燒き直す必要があったので、そのまゝ釜のなかに投込まれた。
爺さんは、ぷすぷすと煙の立っている芋を、三つとも大事そうに新聞紙にくるんで、かさこそと内ぶところにしまい込んでしまった。そして獨語の様に
「こうしておけば、懐爐代りにもなる」
と云い云い、表に出て來たが、そこに立って待っている金子氏を見ると、
「いや、お待たせしました。さあ、そろそろ出かけましょう」
金子氏は、その時初めて自分がそこに立っていたことすら、すっかり忘れられていたのに氣がついた。
寒風の吹きしきるなかを、その日は半日がかりで兵庫の店々を歩き廻った。二人が疲れた足を引きずるようにして、相生橋まで歸って來た頃には、あたりはもう薄暗くなりかけて、粉雪さえちらちらと降り出していた。
「すっかりくたびれた」
二人は橋の欄干にぐったりと身体をもたせかけた。職工らしい、汚れた身なりをした男が三四人、一緒になったり、ばらばらになったりして、右から左から見えては消えた。
「金子さん、今日はほんとうに御厄介をかけました。お腹も空いたでしょうから、これでも食って下さらんか。」
爺さんは内ぶところに手を入れて、燒芋を二つ取出した。
「ありがとう。」
金子氏がかじかんだ手を伸して、芋を二つとも受取ろうとすると、爺さんはちょっと手を引込めて、一つしか渡さなかった。
「さあ一緒に食べましょう。」
暮れてゆく港町の雪降の眺めを前に、二人は鼠の様な口もとをして、なま暖い燒芋を噛った。
「働いてから食べると、こんなものでもうまいですな。」
黒焦げになった芋の皮のへばりついた唇で、爺さんはこんなことを云った。
「そうですとも。」
空腹にちょっぴりと入れたので、かえって餓じさを一層ひどく感じ出したらしい、若い案内者は、氣がなさそうに云った。
「まだ食りますか。」爺さん寒さに震えていた。
「へい、いただきます。」
若い案内者は、芋がなかったら、犬でも、猫でも、牛乳屋の屋根看板のふとった牝牛でも、皺くちな新聞紙でも、腹一杯食べたいらしかった。
「こゝに先刻のが今一つ殘っています。」爺さんは瘠せた手で、一寸ふところを押えて見せた。
「これを上げてもよろしいが、しかし、一つは殘して置かんと何だかふところが寂しいたよりない氣持がするもんですから……」
街にはすっかり灯が入った。雪は降りしきっている。二人は肩をすぼめながら、右と左とに別れた。